

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 コンスタン 『アドルフ』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



リベサヨの元祖
コンスタン



エレノールのモデル
スタール夫人

記念すべき第 100 回のツイキャス読書会の課題図書は、コンスタンの『アドルフ』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

愛の病のお薬

サッカー女子ワールドカップ決勝戦で澤穂希選手がチームメイトに「苦しい時は私の背中を見なさい」と声をかけ、彼女は言葉だけでなく、走り続け、声を出し続け戦った。

チームは王者アメリカになんとか食い下がり、PK 戦の末栄冠を勝ち取った。実に日本人好みのエピソードだと思う。

アドルフとエレノールはどうだったか？ お互い愛の言葉、憎しみの言葉を掛け合っても愛するということの実践もなく、時間と距離を少し空けるだけで別れるでもない。

彼らの言葉での表現ばかり目に付いた。

「言葉は薬の箱の効能書きのようなもので、実践を伴わないと意味がない」と大阪釜ヶ崎の日雇い労働者達の支援を続ける本田哲郎神父が著書の中で語っている。

アドルフとエレノールは実践が伴っていなかったのだろう。

私は神の姿を見たこともなければ、その声を聞いたこともない。

愛というものが何を指し、自分がそれを実践できているか疑わしい。

長年一緒にいる夫婦だって愛があるから添い遂げられ続けている、という方々ばかりでもないようだと言先輩方を見て感じる。

お金で繋がれた関係、別れると子供がかわいそうだとか、周りの目があるから、今更別れたところで等、別れずにいる理由が様々あるようだ。

ただ「愛なんてないわよ」と笑いながら体の不自由な旦那さんをビシバシ叩いてベッドから起こして車椅子に乗せたり、食事介助をしたり、オムツ交換をする年老いた奥さんの姿を見ればこちらも笑顔になり、なんだか力をもらえた気になる。

その力を原動力にし、誰かの為に自分も動いているんじゃないかと最近思う。

これを愛というかはわからないけど、なんだか自分と自分以外の人との繋がりを感じます。

反面教師になってくれたアドルフとエレノールに感謝。

(おわり)

『か弱気き者』

今回の課題図書は同じ作品で二種類の出版社から出ていたので迷いましたが、表紙が良かったので岩波文庫の方を購入しました。

アドルフという恋に恋する青年が自分より 10 才も年上で、ある伯爵の家に居る女性を好きになっておきながらも、とんでもなく身勝手にどうしようもないなと思いました。

女性は、とくに昔は地位も低くて自由もなく周りの男の人は自分の思い通りになる女性を側に置きたいと思う男の人ばかりでいつも虐げられていて不幸だなと思いました。

でも、エレノールはそんなに弱い女性だったのかな？ と少し疑問に思いました。

一緒に住んでいた伯爵の財産を取り戻す事も出来たし、ほんとはきっと頭が良くて自立した女性なのではないかと思いました。

アドルフの心が離れてしまっていると気づいていながら別れようとしなかったのは何故だかよく分かりませんでした。

女の意地みたいな事なのか？ どうしても離れたくないと思わせる魅力がアドルフにあったのか？

アドルフとエレノールは、お互いを愛していたのかもしれないけれど本当の愛ならお互いの幸せを願って別々の道を選んで欲しかったと思いました。

お互いの愛が違う方向に働いてお互いを傷つけて最悪な結果になったように思いました。

すべてはアドルフが悪いのだけど、少し気の毒なような可哀想な人だなと思いました。

(おわり)

『イタイ』

この小説を読んだ私の読後感だが、エレノールに対する気持ちが冷めてしまったのに、それでも関係性を断ち切れないアドルフを責める気持ちがどうしても残ってしまう。

アドルフはエレノールが自分を束縛することなどを理由に作中でエレノールを責めているが、私にはエレノールを責める気持ちは起こらなかった。エレノールにとっての献身の対象がP伯爵からアドルフに移り、アドルフへの献身がエレノールのすべてとなった。この変化は女性にとっておそらく男性とは比べ物にならないほど劇的なものだ。エレノールの忠誠心は、嘘のない純真なものだと私には感じられるし、エレノールにとっては、二人の関係が世間にどう見られようとも、アドルフが自分を受け入れてくれる限りは生きていけるのだ。

エレノールが不遇な中でP伯爵に10年奉仕したのに対し、アドルフがエレノールに付き添ったのはたった2~3年なのに、あたかもエレノールにすべてを捧げたような気持ちでいることに二人の温度差を感じる。エレノールにとっての2~3年はただの助走期間に過ぎなかったのではないか。

逆にアドルフに言いたい。

「もう愛していないなら、関係を清算し、さっさと立ち去ることができなかったのか。」

これができない男性だと、女性との個別の関係は複雑になり、どうあっても離れられない共依存関係に陥るのだと思う。女性は献身相手が自分に振り向いてくれていることに生きがいと自信を得る。それをなくすとボロボロになる。

男性が愛しているふりをして中途半端な同情心で女性を振り切らないのはかえって罪を重くする。「捨てられた」女性は必ず傷つくけれど、「どんなに献身しても自分に振り向いてくれない相手にどこまで執着するか」は個人差があるように思う。エレノールは一途さが際立っている印象はある。

関係を清算したい気持ちがあるなら、男性側が努力して二度と会わない環境を作ることこそが、何よりの傷薬ではないか。

こんなふうじゃあしやあと書いてしまう私は、もうオバサンになってしまった証拠なのかな。これでも癒えない傷の一つや二つは持っているのだけれど。女性は誰かに献身しているときが一番美しく輝いているように思う。世間的にうまく生きられなくても、気持ちに忠実に生きるエレノールのような生き方を、まったく否定する気にはなれないのが本音だ。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 恋のあとさき 』

恋なんて、錯覚だ。いや、人間関係自体がそうなのだろう。

エスパーでもない限り、他人の心は読めない…はずなのに、わかったような気になる。

お互いに違う方向を見ている、同じ方向を見ていると思ひ込む、もしくは信じたいのが「恋」だとこの小説を読んで、ますます実感する。

個人的な見解だと、恋愛における「快」楽と「苦」悩の割合は1:9だと思っている。成就した喜びの後には、倦怠や束縛、葛藤に嫉妬…とありとあらゆる感情が誕生する。だからこそ、他の小説では描かれることの少ない、恋の成就後の圧倒的な心理描写に、思わず面食らってしまう。

今まで出会った恋愛小説は、ストーリーが主で、心理描写の掘り下げ具合は読者におまかせという作品が多かった。だから、物語として読むことができ、心の深部までヒリヒリすることはなかった。

だが、この小説は主人公のアドルフの心理描写が中心で、限りなくリアリティを感じる。普段は、決して言葉として顕在化させない思いまで描写してあって、私はヒリヒリしっぱなしだった。思い当たるところだらけだから。

青年貴族のアドルフは、P伯爵の愛人であるエレノールを「戦利品」として、自らの自尊心を満たすために、恋をしようとする。しかし、彼は安易に手を出すべきではなかった。人間の感情ほど、厄介なものはない。他人の心が読めないのはもちろんのこと、自らの心でさえ人間はわからない。本当の心の内を、勝手に誤魔化すことまでしてしまう。案の定、アドルフは、エレノールとの恋愛のしがらみに絡めとられてしまう。

(引用始め)

そもそも愛とはあらゆる感情の中で一番身勝手なものであるがゆえに、傷を負ったときには高潔と遠いものになるというのである。

(光文社古典新訳文庫 P.98)

(引用終わり)

結局、エレノールの死をもってでない終わらないくらい、のっぴきならぬところまで行き着いてしまった。ただ、人間には愛されたい、承認されたいという欲求には抗えないのか、エレノールはアドルフが自分を愛していないことを知りつつ、自らその事実を否認してしまう。アドルフも、エレノールと結婚することも共に死ぬことも望んでいないのにも関わらず、別れきれない。この状態をもはや「恋」と呼んでいいのか…わからない。

恋が錯覚なんて、客観的には理解できるけど、自らが陥るとそうはいかない。だから、私はこの小説でヒリヒリするのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『インランド・エンパイア』

エレノールはポーランド分割(光文社文庫版 P29 注)で財産を失った貴族出身である。母国語を封じられてP伯爵の愛人として、美貌と気合で生き延びてきた。政治体制が許せば、故郷のポーランドで華やかに一生を過ごしたはずだ。しかし、ロシアに亡命していた父から相続し、親族とその所有権を争った財産は、そもそも、皇帝ナポレオンのおかげで取り戻せたものだ。

ナポレオンこそが、フランス革命の財産として、所有権という概念をヨーロッパ近代法のなかに確立した。「所有こそすべての政治的結合の根本的基礎である」と豪語した彼は、革命によってもたらされたフランス市民の『自由』や『平等』などというイデオロギーは、権力基盤の足しにもならないので、軽視していた。それよりも、革命後の国家と市民の新たな結合の原則として、また、反動(王政復古)を防ぐためにもブルジョワの私有財産の保護に全力を傾けた。1804年に制定された『ナポレオン民法典』における所有権の確立と、妻の夫への従属の明文化は、王族貴族の所有権の根拠を根こそぎにし、リベラル勢力の行き過ぎた自由・平等主義に釘を刺すものだった。そして、自らが皇帝に即位することで、ブルボン王朝の息の根を止めた(つもりだった)。コンスタンやエレノールのモデルと言われるスタール夫人は、革命の理念を蔑ろにする独裁者ナポレオンに反旗を翻し、護民府(日本でいう衆議院)で戦った。理念ばかり振りかざす彼らは「イデオログ(現代のリベラル左翼の元祖＝ロマン主義的自由主義者)」とラベリングされ、ナポレオンによって徹底的に排除されて、亡命を余儀なくされた。

ナポレオンは第四次対仏大同盟から、フランス革命の遺産(ブルジョワの所有権)を守るべく、王国であるプロイセンや帝政ロシアまで攻め込んだ。戦争に勝利し、ロシアと結んだテルジット和約により、ポーランドはワルシャワ大公国(フランスの衛星従属国)として復活した。

そんな経緯があって、エレノールは限定的に復活した祖国に戻る事ができたのである。

で、何が言いたいかというと、エレノールは出自からすれば(ザクセン選帝侯の大臣の息子)反ナポレオンであるはずのアドルフに、ナポレオン戦争で死んでほしかった。そうしないと、ポーランドの真の独立はない。そう入ってもアドルフは、そこまで根性のない性格の弱いやつなので、知恵は空回りするが、意志はない。エレノールを巡る決闘で死ぬわけでもない。そんなアドルフの無性格に、エレノールは絶望して死んだ。ポーランドのために、自分の財産のために、自分への愛のために、アドルフに死んでほしいというラディカルな意志が、彼女の核心だった。

アドルフがポンコツなのは、ナポレオンに政治思想の上で勝てないコンスタンが、常に皇帝ナポレオンに後塵を拝していたのに似ている。アドルフは、自由主義的反動というコウモリみたいなリベラル左翼のはしりである。三島由紀夫は、ラディカリテ(徹底性)を欠いたこのポンコツ左翼＝アドルフを『全世界に一般化された病的性格』と喝破している。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343